

修士論文(要旨)

2013 年 1 月

中国の中等学校における日本語学習者の動機づけ
-自己決定理論の観点から-

指導 齋藤伸子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
211J3010
呉玲林

目 次

第 1 章 はじめに.....	1
1.1 研究の動機.....	1
1.2 中国における中等教育の日本語教育.....	2
1.3 D 高校における日本語専攻.....	2
1.4 研究目的.....	3
第 2 章 先行研究の概観.....	4
2.1 自己決定理論に関する先行研究.....	4
2.2 動機づけと 3 つの心理的欲求に関する先行研究.....	5
2.2.1 有能性に関する先行研究.....	5
2.2.2 関係性に関する先行研究.....	6
2.2.3 自律性に関する先行研究.....	6
2.3 動機づけの分類から見る動機づけ先行研究.....	7
2.3.1 外発的動機づけと内発的動機づけ.....	7
2.3.2 統合的動機づけと道具的動機づけ.....	8
2.3.3 中心的動機と周辺の動機.....	9
2.4 用語の定義.....	9
2.5 本研究の位置づけ.....	10
第 3 章 調査概要.....	11
3.1 調査目的.....	11
3.2 調査方法.....	11
3.3 調査対象.....	11
3.4 調査手順.....	12
3.5 分析方法と目的.....	12
3.5.1 アンケートの分析方法.....	12
3.5.2 インタビューの分析方法.....	14
第 4 章 アンケート結果の分析と考察.....	17
4.1 留学経験の有無による学習者の動機づけの相違.....	17
4.2 留学経験なしの学習者.....	17
4.2.1 自己決定性の高い動機づけについて.....	17
4.2.2 自己決定性の低い動機づけについて.....	18
4.2.3 自己決定性の高低に関する分析について.....	20
4.3 留学中の学習者.....	21
4.3.1 自己決定性の高い動機づけについて.....	21
4.3.2 自己決定性の低い動機づけについて.....	22
4.3.3 自己決定性の高低に関する分析について.....	23
4.4 分析のまとめ.....	23
第 5 章 インタビュー結果の分析と考察.....	25
5.1 CM1 の事例.....	25
5.2 CF1 の事例.....	29

5.3	CF2 の事例.....	34
5.4	CM2 の事例.....	38
5.5	分析のまとめ	43
第 6 章	総合的考察	44
6.1	内発的動機づけに関する考察	44
6.2	同一視的調整に関する考察	45
6.3	取り入的調整に関する考察	46
6.4	外的調整に関する考察	47
6.5	無動機に関する考察	48
第 7 章	おわりに	50
7.1	まとめ	50
7.2	教育的示唆	50
7.3	今後の課題	51

謝辞

参考文献

添付資料

要旨

キーワード[留学、動機づけ、自己決定理論、有能性、関係性、自律性]

第1章 はじめに

本研究は、中国のD中等学校の日本語学習者を対象とし、留学経験の有無に焦点をあて、留学の有無による動機づけの相違を明らかにし、動機づけに関わる要因も考察する。

第2章 先行研究の概観

自己決定理論は広範な理論的枠組みを提供する可能性を持っており、自己決定性の程度によって動機づけを5つの段階に分け、動機づけを連続体として示している。この理論を用いると動機のプロセスが見られる。また、個々の学習者に注目し、学習者一人一人の動機が動的に捉えられる。本研究では学習者の個人の動機づけの変化を捉えることを目的とするので、自己決定理論を採用した。ただし、この理論を採用した理由はもう一つある。それは多くの動機づけに関する先行研究では、動機づけに関わる要因は有能感と関係性と自律性であるとされており、この3つの要因には自己決定理論における3つの心理的欲求が含まれているためである。

高岸(2000)と原田(2008)の研究からは、留学が動機づけに影響を与えていることが分かっている。そこで本研究では、中国人日本語学習者を対象に調査を行い、留学の有無による動機づけの相違を明らかにし、動機づけに関わる要因も考察する。

第3章 調査概要

アンケートは廣森(2006)を参考に、協力者が日本留学を目的としている特徴を考慮し、協力者にとってより適切な質問項目25項目を作成した。質問項目の番号を調整し、日本語と中国語の翻訳を併記した。5件法の尺度を設定し、自己決定理論を参考とし、自己決定性の高低を比較した。留学経験がない協力者は10名、留学中の協力者は13名で、合わせて23名である。アンケート結果を踏まえ、アンケート協力者の中から4人にインタビューを行った。留学経験なしの学習者2人と留学中の学習者2人を対象とし、動機に比較的大きな差異がある協力者それぞれ2人ずつを選んだ。

第4章 アンケート結果の分析と考察

留学経験なしの学習者の方が内発的動機づけも外発的動機づけも高かった。しかし、無動機は留学中の学習者の方が高かった。つまり、留学により、動機が低くなる傾向があり、留学経験が自己決定性を高められるわけでないことが分かった。

第5章 インタビュー結果の分析と考察

学習成果と達成感が動機を喚起する重要な要因の一つであることが明らかになった。また、具体的な学習目標を持つことが動機を喚起する。外国語習得の重要性和将来の仕事に繋がると意識することが、自律的に動機を喚起することが分かった。さらに、面目を潰さないためと良い成績を保つことが、動機喚起と強化に有効な働きをしていることも明らか

となった。加えて、学習者が学習を自己調整していること、そして学習を支援する第三者の役割も大きいことが分かった。留学による変化はCM2の例から多く見られた。日本人との接触が多くなり、日本語使用機会が増えてくると日本語の重要性を感じるようになり、動機が強化されるが、日本語力が弱いため、日本人との関係を構築できず、結局動機が下がるということが生じた。

第6章 総合的考察

インタビュー結果はほとんどアンケート結果を支持している。内発的動機づけのアンケート結果である、知識欲が満たされることが動機を高めることと、授業に対する熱意が高くないことは、インタビュー結果でも確認できた。また、楽しくない授業は中国人教師の授業を指し、楽しくない理由も判明した。それは学習者と教師との関係性が欠けており、授業が学習者のニーズを満たせないからである。つまり、内発的動機づけは、有能性及び関係性と密接な関係があるということである。

また、重要な他者である日本人・友人・親・教師は動機に大きな影響を与えることが分かった。特に、中国人教師にできることが多いことを示している。だが、友人からの影響は必ずしも動機にプラスの効果を与えるわけではない。友人との関係は、単に良好な関係であることが必要なだけでなく、有能感を介して動機に作用する。

さらに、具体的な目標を持っている学習者は、自律性が高いことが分かった。

まとめると、自己決定理論の3つの心理的欲求は相互作用している。有能感は動機づけに強く影響している。良好な関係性は動機づけに影響を与えているが、有能感を介して動機に作用することもある。自律性は有能感を介して動機に作用している。たとえば、CF2は有能感を感じているため、自律的に学習に取り組んでいるが、CM2は勉強などに対応できないため、有能感を感じられず、その結果関係性もうまく構築できず、動機が低かった。

第7章 おわりに

学習者は日本語使用機会を求めているため、中国ではアウトプットを重視した授業がさらに必要であり、留学後の学校側は日本また日本語に関するリソースを活用したり、日本人と接触できる機会を作ることに努力したりする必要もある。中国人教師は教室活動や教授法を工夫しなければならない。また、学習者に具体的な目標の達成を促すことが必要である。

主要参考文献

- 飯塚住子(2005)「日本語学校に通う留学生の動機づけの要因一半年間のネットワークの変化から」『小出記念日本語教育研究会』13 pp. 39-54
- 岩本尚希(2010)「外国語学習者の学習継続要因に関する一考察-言語学習ヒストリーから」『桜美林言語教育論叢』第6号 pp. 29-43
- 郭俊海・全京姫(2006)「中国大学生の日本語学習の動機づけについて」『国際センター紀要』第2号 pp. 118-128
- 郭俊海・大北葉子(2001)「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』110号 pp. 110-139
- 工藤多恵・楠木理香(2004)「外国語学習に対する動機づけを促すために - 外国語教師にできること -」『立命館高等教育研究』 pp. 25-35
- 侯麗(2004)「日本語学習への動機づけ-高校生の日本語学習動機を中心に」『东北师范大学硕士学位论文』東北師範大学学位評定委員会
- 宋馨華(2005)「グループワークが文法知識の獲得と授業の満足度に及ぼす影響-中国人の初級日本語学習者を対照として-」『言語文化と日本語教育』29 pp. 15-20
- トルニエイ, ザルタン著、米山朝二・関昭典訳(2005) *Motivation Strategies in the Language Classroom*『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店
- 當山明華(2010)「高校生学習の動機づけと将来展望に関する研究」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第58集第2号 pp. 329-341
- 高岸雅子(2000)「留学経験が日本語学習動機におよぼす-影響米国人短期留学生の場合-」『日本語教育』105号 pp. 101-110
- 千葉朋美(2012)「日本の大学で学ぶ中国人日本語学習者の動機づけと自律性-自己決定理論の視点による探索的研究-」『2012 年度日本語教育学会春季大会予備稿』日本教育学会 pp. 85-90
- 西部由佳(2009)「教室内外での出来事による学習者の「学習者の「学習意欲」の変動とその背景となる心理的要因-「可能性の予期」に注目して-」『小出記念日本語教育研究会』17 pp. 21-34
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩(1995)「大学生の日本語学習動機に関する国際調査-ニュージーランドの場合-」『日本語教育』86号 pp. 162-172
- 原田登美(2008)「留学経験は学習動機にいかに関わっているか - 「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化-」『言語と文化』 pp. 151-171
- 廣森友人(2003)「学習者の動機づけは何によって高まるか-自己決定理論による高校生英語学習者の動機づけの検討-」JALT Journal, 25-2, 173-176
- 廣森友人(2006)『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版
- 李受香(2003)「第2言語および外国語としての日本語学習における動機づけの比較-韓国人日本語学習者を対象として-」『世界の日本語教育』13号 pp. 75-92
